

縁

縁は襖の外周を囲って、強度の点からも機能上からも重要な役割を果たし、デザイン的には、上貼り紙とあいまって襖の美しさを引き立てます。

縁の太さはいろいろですが、最近の意匠設計の傾向として、細縁を使うことが多くなってきています。また、色も洋間続きの和室になじむものが登場するなど、バラエティに富んでいます。

■縁の素材

縁の素材は、一時、量産用としてアルミや合成樹脂のものが出まわりましたが、建て合わせなどの作業性が悪いため、現在では、ほとんどが木製になっています。主な産地は和歌山です。

■木製縁の種類

木製縁は大別すると、「生地縁」(木地縁)と「塗り縁」に分けられます。塗り縁の方が主力ですが、近ごろは、生地縁の細縁が好まれる傾向にあります。

しかし、生地縁は日に焼けやすく、汚れやすいという欠点があります。その点、塗り縁は汚れもつきにくく、耐久性に富み、特に天然漆を使ったものが、もっとも優れています。

A) 生地縁

生地縁には、赤味杉柁、檜、ひば、たも、栗、などが用いられますが、これらの国産材はだんだん手に入りにくくなっているのが現状です。そこで、それにかわって外材のスプルース、米杉柁などの生地縁が大半を占めています。

生地縁は、全く加工しない生地のままのもの、汚れ止めに、ワックスや透明塗料を塗ったものがあります。

B) 塗り縁

塗り縁の下地の素材としては、檜、ひば、杉、スプルース、米杉などですが、やはりこちらスプルース、米杉が主です。

塗料は、漆、カシュー、ラッカーなどで、主流はカシューです。

■塗りの種類

塗り方としては、塗り立てのままの「花塗り」と、塗ってから表面の艶を消して磨く「磨き仕上げ」とに分けられます。

①花塗り

油分を含んだ漆を塗り、乾かすだけで研ぎ出さない技法。漆特有の光沢があらわれ、塗り立て、立て、などとも呼ばれます。工程は少ないが漆を均等の厚さに塗り、かつ刷毛目や塵埃もないようにするには熟練を要し、漆濾しも中塗りなどよりも回数を多くし、刷毛も上塗り専用のものを使用します。上等のものを上花塗り、中級のを中花塗り、並みのものを三方塗りといいます。

□黒塗り

“漆黒”という言葉があるように、漆の代表的な色である黒漆を上塗りにしたもの。艶のある黒漆で塗る仕上げ(黒塗り立漆、黒花塗り立漆)と、艶のない無油の黒漆で仕上げる技法(黒艶消塗り)がある。

□朱塗り

朱合漆、朱合蠟漆に朱の粉を重量比で等量混ぜ合わせた朱漆で上塗りしたもの。朱漆は朱の顔料が、化学変化をおこしやすく、色変わりしやすい。

□潤み塗り

黒の花塗り漆に弁柄または朱の粉を混ぜ合わせた弁柄漆や朱漆を塗ったもの。あるいは朱合漆に油煙(松煙)と朱の粉または弁柄を混合した潤み漆を塗ったもの。朱潤み、弁柄潤みとも呼ばれ、落ち着いた色合いである。

□目はじき塗り

櫛、栗、たもなど導管の大きい素材に漆を塗ると、導管の内部に入っている空気が、塗面の漆をはじくのを利用して木目を表したものの。

□目起こし塗り

錆研ぎをした木地面に銚先で木目に似せて線彫し、木目の高い部分にのみ漆がつくように塗ったもの。

□春慶塗り

透明塗りの一種。黄色ないし紅色に着色した木材素地に透明漆(春慶漆)を上塗りして、漆の膜を通して木地を表したものの。黄色はくちなしや雌黄を用いて黄春慶と呼ばれ、紅色は洋紅や弁柄を用いて紅春慶といわれる。14世紀に堺の漆工・春慶が考案したものとされる。

- 縁の素材
- 木製縁の種類
- 塗りの種類

□溜め塗り

木目の上に朱漆や赤漆、黄漆、青漆を中塗りし、その上に透漆を上塗りしたもの。半透明の美しさがある。木目を出さずに中塗り

した色漆の上に透漆を塗る方法もある。朱溜め、赤溜め、青溜めなどと呼ばれる。

□塗り蠟色

艶のない無油の黒色漆で塗ったもの。

●このほか、変わり塗りとして布目塗り、虫喰い塗り、梨地乾漆粉蒔きなどがあります。

②磨き仕上げ

□黒蠟色塗り

上塗りにおいて黒蠟色漆を塗り、乾かす。次に朴炭か静岡炭で研いで平滑にする。さらに蠟色炭で研いで塗面を滑らかにする。その後、研ぎ面を油と砥の粉で胴摺を行い、すり漆と角粉磨きを三度くりかえし、充分光沢を発したら仕上げとする。花塗りは、塗りっぱなしであるのに対して研磨する点、工程的に異なり、したがって光沢も花塗りより堅くて強い感じになる。

□朱蠟色塗り

上塗りにおいて朱の粉を朱合蠟色漆、または木地蠟色漆に混ぜ合わせた漆を塗り、黒蠟色漆塗りと同じ工程で仕上げたもの。

□根来塗り

黒の中塗りに朱漆(朱の粉を混ぜた朱合蠟色漆、木地蠟色漆)で上塗りをし、ところどころに中塗りの黒を霞のように研ぎ出したものを蠟色仕上げした塗り方。元来は研ぎ出さなくて使っているうちに上塗りの朱がすりへり、中塗りの黒が出てきたものである。

「蠟色磨き仕上げ」の工程の例

①木地固め[きしがため]

刻字やパテなどをうめて面を平らにし、ペーパーで面取りをする。

②刷毛錆[はけさび]

刷毛で錆をつけて下地をつくる。

③化粧錆[けしょうさび]

ヘラで錆を一面ずつつける。



④錆研ぎ[さびとぎ]

水をつけた砥石で錆面を平らにする。



⑤肌直し[はたなおし]

細かいサンドペーパーで、さらに表面をきれいにする。

⑥中塗り[なかぬり]

薄めにといた漆を塗る。

⑦中塗り研ぎ[なかぬりとぎ]

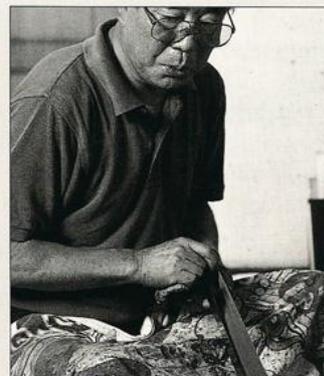
400番くらいのサンドペーパー、または朴の木の炭(静岡炭)で研ぐ。

⑧上塗り[うわぬり]

上塗りの漆を塗る。

⑨上塗り研ぎ[うわぬりとぎ]

非常に細かい1000番くらいのサンドペーパー、または静岡炭などで研ぐ。



⑩胴摺[どうすり]

たんぼで油をひき、次に砥の粉をひいて、さらになめらかにする。

⑪揩漆[すりうるし]

生漆でふき込む。

⑫磨き[みがき]

油をひいて、蠟色磨き粉で磨いて仕上げる。

塗りの種類

磨き仕上げ	
A	梨地布着せ本磨き艶消し
	布着せ本磨き艶消し
	紙着せ本磨き艶消し
	本磨き艶消し
B	半磨き艶消し
	蠟色艶消し
	上花艶消し
	艶消し

上級
↓
一般

花塗り
中塗り付上花
上花
中花
三方

- 艶消し塗りのAの工程は、現在では一般にほとんど用いられない。神社、仏閣など、特別な場合に用いられる。
- 紙着せ、布着せは、縁に和紙または布を貼りつけて、その上に漆を塗ることである。
- 一般には、Bの範囲の工程で行われることが多い。
- 一般的な塗り方では、天然漆でもカシューでも使える。
- 蠟色とは蠟色漆のこと、色の種類とは関係ない。
- 中塗り付上花は、二回上塗りをする事である。
- 艶消しには朴の木からとった炭、または専用の砥石を使用する。

縁の塗装の色

- 黒
潤み＝紫がかった茶色
溜め色＝透明度の高い鉛色系
松葉＝緑
黄
錆色＝青味がかった灰色
洗朱＝赤□・黄味がかった朱
黄□・黄色っぽい朱
本朱＝赤味がかった朱

縁の構成

襖の縁は、縦縁と天地縁とで構成されています。

縁の太さは、見付きと見込みの寸法で表します。見付きとは横から見た幅、つまり厚みのこと、見込みとは正面から見た場合の幅のことをいいます。

サイズは細縁から太縁まであり、それぞれの寸法は、別表のようになります。

A) 縦縁

縦縁には、ドブとマスがあります。

□ドブ

引手をつける側に使う縁のことで、見付きも見込みも、6分5厘のものが一般的。

□マス

引手のつかない側に使う縁のことで、通常、見込みが見付きよりも太く、7分5厘のものが一般的。襖と襖の間のすきまを狭めるために、マスが太くなっている。

B) 天地縁

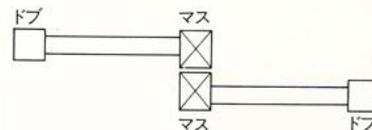
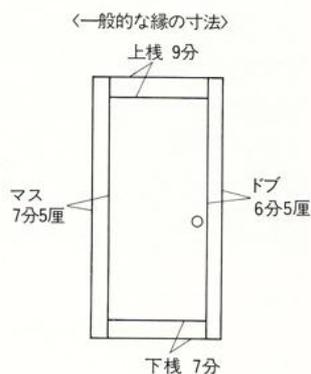
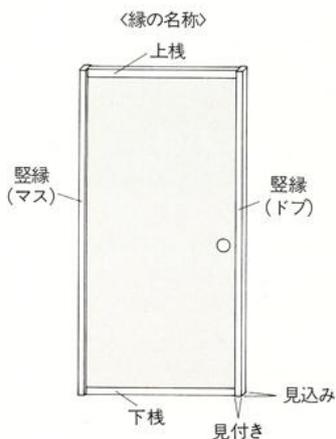
上部の縁を上棧、下部に使う縁を下棧といます。

□上棧

襖の上部に使われる縁のことで、見付き9分、見込み6分が一般的で、鴨居の中に入る。

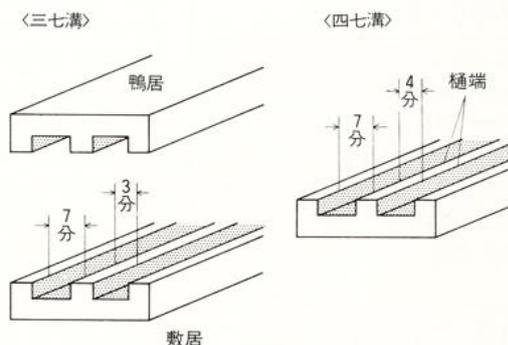
□下棧

襖の下部に使われる縁のことで、見付き7分、見込み6分が一般的で、敷居の中に入る。



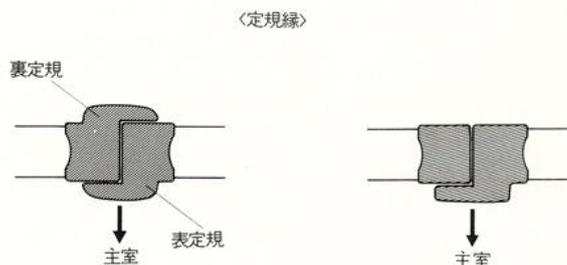
■縁の塗装の色
 ■縁の構成
 ■縁の取り付け方

代表的な見付きの寸法		溝の種類によって見込みは必然的に決まる	溝と見込みの関係	
縁の太さ	見付き		溝	見込み
細縁	4分	三七溝	ドブ5分5厘	
	5分		マス6分5厘	
並縁	6分5厘	三七溝	ドブ6分5厘	
			マス7分5厘	
太縁	8分	四七溝	ドブ6分5厘	
	1寸		マス8分5厘	



C) 定規縁

これは4枚立や観音開きの襖の場合に、その中央の襖と襖のすきまを隠し、襖の体裁を保つための縁のことで、両面につける両定規と主室側の片面だけにつける片定規とがあります。一本の木を削って定規としたものと、縁に板をとりつけて定規としたものがあります。



■縁の取り付け方

縁の取り付け方には、①印籠、②木ネジ、③折れ合い、④打付、の4種類があります。

①印籠

縁の内側に骨が入り込むように削りとりあり、柄の違いなどによって本印籠、皿印籠、片印籠の種類がある。上級品に用いられる取り付け方である。建築用語でいう印

籠とは全く違うので注意。(21ページを参照)

②木ネジ

皿(ネジ頭)の大きな木ネジを框につけ、縁にあけてある穴と溝を利用して、取り付けの方法で、ネジは表面には見えない。最近では逆目釘を用いることもある。

③折れ合い

くの字型の折れ合い釘で取り付ける方法で両先が針になっているので、釘が表面に

見えずに取り付けられる。くの字に折れたように曲がっていることから、こう呼ばれる。(21ページを参照)

④打付(ぶっつけ)

ピンバ釘などで、骨に打ちつける方法で、表面に釘の頭が見えてしまうので、廉価な襖に用いられる。